

僕の名前は馬場惣平、ガンガンいける色白、笑顔がキュートだと言われる22歳のイケメンです。北海道岩見沢で父と一緒に米国大豆、小麦、ソバをデッカクやっています。この冬は僕にとつて感動と驚きの経験となりました。

今までにニュージーランドに1年間と米国・ノースダコタ州の農場に2回行き、やはりビッグな米国農業の賢さをしっかりと肌身にかけてきたのですが、「ちよつと毛色の変わった金髪・ブルーアイに興味はないか？」と昨年の春頃に、誘惑とも思える悪魔の囁きがああヒール・ミヤイさんからありました。

きっかけは、2013年3月に両親と父の友人とヒール・ミヤイさんがオーストラリアに行ったことです。なんでもヒール・ミヤイさんが79年に働いていた農場や第二次大戦中の日本人捕虜収容所を訪れたそうです。その農場は当時よりも大きくなり、経営も次の世代に受け継がれたと聞いていました。渡航に関してチラッと両親に話をしましたが、思い切つて昨年12月4日に千歳を発して成田経由のJALの深夜便でオーストラリアに向かいました。

日本を出発するときに、正しくは用意してはいけない物があります。それは農作業に使うと思われる作業

靴や作業服です。シドニーの税関検査で、これは何に使うのだ？と聞かれて、特別出演のアジア系が売りのニューハーフ・バーに出ます……なんてことは言えないので(笑)。その点、ジーンズは作業着にもなるし普段着でも使えるので便利ですが、農作業に必要なものは現地で購入ことを過去の経験から学びました。

本来であれば労働になる可能性もあるので正規のビザやワーキングホリデーを利用するのが基本ですが、手続きに手間がかかるし、今回は5週間と短期なのであくまで観光を兼ねた視察!だと勝手に理解してネットでビザを取りシドニーに向かいました。

到着後に入国検査で並んでいると、私の前にハデな格好をしたアジア系の若い女性2人が入国審査官からかなりしつこく質問を受けていました。話すアクセントから明らかに日本人ではないし、この手の女性たちが単なる観光目的でない場合もあると聞いていたので審査が厳しくな

日野の2tください (堤真一TVコマーシャル)

Vol.83



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

るのは当然で、その後、彼女たちはTVのシーンでよくある、係員に付き添われ別室に行き出発地に返されるのだろうかと考えました。もしかしたら官憲から「JALなんか乗らないで初めからユーガイズはナッツ・リタインの飛行機に乗ればよかったのに」なんてことにならなければと心配しました。

私は審査官からは一切の質問もなく入国できました

た。ありがたや菊のご紋は決して世界を裏切らない。ガッド・ブレス・ジャパニーズ・バスポートなのです。シドニーから最終目的地のメルボルンに到着してスーツケースを手にしましたが、具体的に誰が迎えに来るかは打ち合わせをしていませんでした。でも、心配は要りません。だって、経験に基づく揺るぎのない自信があり、ヒッチハイクしてもたどり着くつもりでしたから。

到着ロビーに出るとアジア系は数人なので声をかけてくれると思っていました。が、キョロキョロしている30cm×20cmくらいのボードに「Sohay」の文字が見えました。近くを通ったのですが全くの無視。俺の名前は「Sohei」だし。でも、発音はボードの方が正しいような気がして、ボードの方向に戻って「ハロー アイアム ソーヘイ」と言うと相手も喜んでホッとした様子。ホストファミリー・トロイの奥さんのジョーディと娘のマリーでした。

日本と同じ右ハンドルのフォードSUV車に乗って一路北を目指しましたが、途中のシェパトンという町でバレーの発表会をしていた娘のママとブリッジと会い、食事をしてから夜の8時頃に最終目的地のジュリルデユリに到着しました。

翌日は雨で休み、次の日も休みで

1時間ほど離れたヴィクトリア州との境にあるマレー川にトロイの家族とキャンピングへ。やけに余裕だなぁと思っていたら、なんでも麦の収穫が1週間ほど早まり作業に余裕ができたとのこと。

農作業が始まると、スプレーヤーのタンクを外してステンレス製の10tタンクに鶏糞を乗せて散布したり、320馬力のケーストラクターで10m幅のディスクにGPSを使ったりオート・ステアアで麦跡を起こしたりするのですが、あまりにも正確にまっすぐ走るので睡魔との戦いになりました。FMラジオから聞こえてくるオージー・カントリーは、米国よりもスローテンポなので、ますます眠くなってしまうのはハイテクの代償なのでしょうか？

ジャン・ジャン系は容認

綺麗な英語を話すアイルランドから来た28歳のジャンはとてもまじめで、一人で作業を任されていました。が、バイト終了のため世界放浪の旅に出発しました。他にも地元出身で、18歳から働いて現在28歳のトレンと組むことがありました。トロイの家から20km離れた作業場にある一軒家に住み、ビールをこよなく愛するオージーで、仕事が終わるといつもハブに行こうと誘われます。

酒が強い私には週に1度か2度程度に抑えていましたが、仕事が終わったある晩、トレンと家でビールを飲んでみると「ハンティングやるぞー」ということになりました。夜行性のピョン・ピョン跳ねる生き物をサーチライトで照らし、マニュアルのダットラから8連発のショットガンでバッター・バッターと20匹程度倒しました。

夜行性でボクシングが強そうなピョン・ピョン系は許可を取れば問題なく、この辺りでは農場フェンスを壊すので近所に迷惑をかけなければ、ガンガン殺し放題のようでした。同じ哺乳類の鯨の捕獲にはかわいそうなのと言いますが、ピョン・ピョン系は例外なのでしょうか。

初めてのハンティングに興奮を覚えました。が冷静に考えると、こういう銃の扱いに長け、自分の文化基準を信じるアングロサクソンからは、まだまだ多くを学ばなければならぬようです。

この地は砂漠地帯ですが一部渇水のための水路があり、半日おきにゲートの開け閉めをしなければなりません。みんなが休みの日に、そのゲート操作をすることになりました。いつものダットラに乗りこみ現地に到着すると、水路から水があふれ、粘土質の道路がグチャグチャ状

態。こちらは世界のダットラで四駆だったので、無謀にもそのウエットなところに進んだところ、オーマイガー！ダットラがスタック（ぬかる）してデフまで沈んで亀の子状態になってしまいました。

トレンに電話をかけたようとしたが、休みを邪魔したらずいと思つて、トラクターの置いてある5km先まで歩く覚悟を決めました。いつも水筒を持ち歩いているので何とかなると歩き始めましたが、さすが炎天下45℃超えだったので2kmくらい歩いて州道に出たところで疲れて座り込んでしまいました。

すると日野の4t・ウイング車に乗った同年代の男女が止まってくれて、農場まで送ってくれたのです。この気温では道路でへたつているのは見逃せないと叫びました。あゝありがたい。サンキュー・マイト！（オージー語で仲間）♡

楽しいこともありましたが、近くのトマト加工工場の受付の金髪・ブルーアイのジェナはかわいい。北海道から来たと話したら何度かニセコにスキーに行ったことがあるらしい。また行くと言っていたので、北海道案内でもしようかと考えている。両親に「オーストラリアで仲良くなった娘です」って紹介したらビックリするかな。